

## 『世説新語』の三國描寫と劉義慶

田中靖彦

はじめに

劉宋期に編纂された『世説新語』(以下、『世説』と略稱<sup>①</sup>)は、魏晉期の人士に關する逸話集として名高い。『世説』の撰者は、劉宋の臨川王・劉義慶とされるが、彼の列傳がある『宋書』をはじめとする南朝の正史には、『世説』に關する記載は一切無い。魯迅は、實質の撰者は劉義慶幕下の文人たちかもしれないと述べた<sup>②</sup>。これを嚆矢として、吉川幸次郎「世説新語の文章」(『東方學報』第十冊第二分冊、一九三九年)他が示す通り、同一人物に對する呼稱の不統一性(例えば曹操が「魏武」「曹公」というように)などから、『世説』は複數人の手によって成ったと見るのが一般的である。かかる『世説』理解が一定の合理性を持つことは疑いないが、その一方、從來の研究では、『世説』の編纂に對する文人たちの役割のみが注視を受け、撰者として名の殘る劉義慶と同書の關係については、ほとんど注目されないままとなっている。この問題に對し、筆者の研究テーマである「三國志文化」<sup>③</sup>という側面から迫り、『世説』に見える三國描寫から讀み取れる、同書に込められた劉義慶の意圖を検證せんとするのが、本論の目的である。

### 一、先行研究と本論の視座

『世説』書の撰者および編纂意圖に關する先行研究をまとめ、それを踏まえた本論の視座を示しておきたい。

川勝義雄は、『世説』が劉宋政權に反抗した人物、中でも謝靈運に對し好意的であることに注目し、謝靈運の四友に數えられる何長瑜ら反體制的傾向を持った人物による、劉宋政權批判の書であったと説く<sup>④</sup>。矢淵孝良は川勝説を踏襲し、『世説』は「下の者が上の者を打ち負かす類の逸話」を好んで採録し、とりわけ反逆者として棄市の刑に處された謝靈運に同情的であるとしつつ、同書の反體制的性格はさほど強くないとも指摘し、その撰者を「明日の謝氏を夢みる寒門出身の貴族達であるとした。周一良は、川勝説に理解を示しつつ、『宋書』卷五十一・臨川烈武王劉道規傳附・劉義慶傳(以下、『宋書』劉義慶傳と略記)にはその他の書名は見えるのに『世説』の名が見えないことから、『世説』の著作權を劉義慶に付與するのには疑問もあるが、劉義慶が同書に大きな影響を與えたことは疑いないと述べる<sup>⑤</sup>。また、『世説』研究ではないが、安田二郎は、劉宋文帝の皇族(特に皇弟)

抑制策と敵視に對し、皇弟たちは奢侈や酒といった輜晦の道を選んだと述べ、晩年の劉義慶の佛道への傾倒も輜晦であった可能性を指摘する<sup>(10)</sup>。寧稼雨は、劉義慶が文帝の宗室に對する猜疑と抑制政策により政治的に消沈していたこと、文人氣質を持ち、魏晉の名士に精神的共感を覺えたことが『世説』編纂の動機であると説く<sup>(11)</sup>。

これらの説は、『世説』の撰者が劉宋に對し含むところを持っていたとする點で共通するが、劉義慶の役割に關しては判然としない。實質の撰者を劉義慶門下の文人とする説には、一定の合理性が認められよう。川勝らが指摘するように、『世説』には、劉宋政權への批判的筆致と、貴族による嘗ての良き時代の回顧とが讀み取り得るからである。しかし、では『世説』は、かかる文人たちのみの手になるもので、劉義慶は名義上の撰者に過ぎないのであろうか。

また、謝靈運ら『世説』編纂と同時代人の描かれ方を手がかりとする分析は、『世説』の本質に迫るのに有効である一方で、同時代の事象を記す際には、往々にして忌避や廻護が伴う。そのため、先行研究の重視する同時代人への記述には、必ずしも編者の意圖が十分に盛り込まれない場合もある<sup>(12)</sup>。

そこで本論では、『世説』への一つのアプローチとして、あえて『世説』の同時代描寫から離れ、『世説』の三國描寫を手がかりに分析を進めてみたい。劉義慶と『世説』の關係、そして同書編纂の意圖について、「三國志文化」という切り口から分析し、從來見えてこなかった『世説』の新たな側面を浮かび上がらせんとするのが、本論の狙いである。

## 二、文帝の皇弟抑壓と「皇弟」劉義慶

劉義慶と『世説』との關係を考察するため、劉義慶の略歴および同時代の情勢を、『宋書』劉義慶傳を中心に、少し見てみよう。

劉義慶は、武帝・劉裕の甥で、長沙景王・劉道憐の第二子だが、桓玄討伐に大功のあった臨川烈武王・劉道規に子が無かったため、その後を繼ぐこととなった。だが劉裕の子・劉義隆（のちの文帝）は幼時、劉道規に育てられており、劉裕は劉義隆に劉道規の後を繼ぐよう命じた。その後、劉義隆は劉裕の元に戻り、劉義慶が後繼となった。劉義慶は幼い頃から劉裕に見込まれ、「此我家豐城也（此れ我が家の豐城なり）」と評されている（この評語に關しては後述）。彼は四二〇年に臨川王を繼ぎ、四四四年に亡くなるまで、少なくとも表面上は比較的順調で平穩な人生を送っている。元嘉元（四二四）年より始まる文帝の治世は後世「元嘉の治」と讃えられるが、劉義慶はこの「元嘉の治」の中頃、元嘉二十一年に亡くなっている。

だが、この「元嘉の治」期は、血で血を洗う劉宋皇族の歴史の端緒でもあった。武帝劉裕の後を繼いだ少帝劉義符は、實權を掌握する徐羨之らに廢位・殺害された。それを受けて即位したのが、劉義隆すなわち文帝である。文帝は權臣を排除すると、皇弟・彭城王劉義康を輔政の大任に拔擢、劉義康は元嘉六（四二九）年、侍中・司徒・錄尚書事・南徐州刺史となった。だが文帝は、餘りに強大となった劉義康の權勢を警戒するようになる。安田二郎前掲論文によると、文帝對劉義康という構圖は、元嘉十二（四三五）年には深まっていたという。また、元嘉十六年、劉義慶は八年間鎮守した荊州より江州へ移されたが、同年の二度にわたる大規模な刺史の人事異動は、文帝による宗室（具

體的には(皇弟)勢力の大幅な削減と、皇子依據の州鎮體制の先驅であるという。

翌元嘉十七年、文帝は劉義康派の劉湛の處刑という逆クーデタを敢行、劉義康は侍中・大將軍の地位のまま、都から江州に追われた。これに關する興味深い史料が残っている。

「烏夜啼」は、宋の臨川王義慶の作る所なり。元嘉十七年、彭城王義康を豫章に徙す。義慶時に江州爲りて、鎮に至り、相見え

て哭き、帝の怪しむ所と爲り、徵されて宅に還り、大いに懼る。

〔舊唐書〕卷二十九・音樂志二

江州にいた劉義慶が、劉義康と會つて涙し、帝に疑われ大いに恐れられたのである。これが、文帝の迫害を嘆き恐れたものであることは想像に難くない。寧稼雨の指摘する通り、「〔劉義慶〕少善騎乘、及長、以世路艱難、不復跨馬(少くして騎乘を善くするも、長ずるに及びて、世路の艱難なるを以て、復た跨馬せず)」という『宋書』劉義慶傳の記述は、その武勇を文帝から危険視されることを恐れた劉義慶の處世術と解釋するのが妥當であろう。劉義慶が遡つて元嘉八年、天文を理由に外鎮を求めたのも、いち早く危機を感じ取り、文帝のお膝元から逃れんが爲であったかもしれない。劉義康の失脚を目の當たりにした諸皇弟が奢侈や酒といった船晦に奔つたことは、安田論文が指摘している。劉義慶は文帝の實の兄弟ではない。だが彼は、幼時より武帝劉裕から目をかけられていた上、劉裕の實子が相次いで出鎮した荊州の都督となつており、實質皇弟に等しい存在であった。その上、既に觸れたように、劉道規のもとで一緒にいた時期もあったと思われる。文帝劉義隆にとつて劉義慶は、實の兄弟に等しい存在であり、また世間もそう見たであらう。

その後劉義慶は廣陵にて病を得、都に歸ることを求めて許され、元嘉二十一年に没した。劉義康失脚の四年後のことである。翌年には、劉義康推戴を掲げる謀反が露見し、范曄ほかが處刑され、劉義康はこの事件とは無關係ながら庶人に落とされた。その五年後、文帝は念願の北伐を行うも大敗し、翌年、劉義康に死を賜つた。

劉宋皇族の凄惨な殺し合いは、「劉裕の子孫は、七・八割が非業の最期を遂げた」と語られるほどであった。かかる血塗られた皇族の中であつて、劉義慶の生涯は文帝への恐怖と不満に満ちたものであつたろう。こういった「皇弟」劉義慶の境遇を念頭に置きつつ『世説』を讀むと、同書には、劉宋文帝の人物像が強く投影されていると思しき人物が登場することに氣づく。奇しくも同じ文帝の諡號を持つ曹魏文帝・曹丕である。

### 三、ふたりの「文帝」

(一)「文帝」の皇弟迫害

『世説』における曹丕の扱いは最悪に近い。同書の曹丕描寫の最大の特徴は、皇弟迫害を極めて批判的に伝えられる點にある。世に言う七步詩の故事から見てもこう。

文帝(曹丕)嘗て東阿王(曹植)をして七步の中に詩を作らしめ、成らざれば大法を行はんとす。聲に應じて便ち詩を爲りて曰く、「豆を煮て持つて羹を作り、菽を漉して以て汁と爲す。其は釜下に在りて燃え、豆は釜中に在りて泣く。本は同根より生ぜしに、相煎ること何ぞ太だ急なる」と。帝深く慚づる色有り。(文學第四66)

曹植が兄・曹丕の仕打ちを嘆いたことで名高い逸話であるが、これは

『三國志』及び裴松之注には見えない逸話であり、『世説』が出典とされる。裴松之注には、信憑性の薄い説でも引用し、その上で「有り得ない」と否定する傾向があるから、裴松之は七步詩に關する記述を目にしなかった可能性が高い。七步詩に關する故事を伝える文献が存在し、それが偶然裴松之の収集から漏れただけでも考えられる。だが、裴松之の目に止まらなかった文献を、『世説』撰者が目にした可能性は低い。何故ならば、『三國志』裴注と『世説』とは、ほぼ同時期に成立した書である上に、裴松之は膨大な史料を収集したことで名高い人物だからである。七步詩の故事が『世説』の創作である可能性も考え得る。ともあれ、『三國志』および裴注と比較したとき、この逸話の最大の特色として見えてくるのは、曹丕の曹植に對する非情な態度である。

續いて、曹丕が弟・曹彰を毒殺した逸話を見てみよう。

魏文帝弟たる任城王（曹彰）の驍壯なるを忌む。卞太后の間に在りて共に圍碁し、竝びに棗を噉らふに因り、文帝毒を以て諸を棗蒂の中に置き、自ら食ふ可き者を選びて進む。王悟らず、遂に雜へてこれを進め、既に毒に中るや、太后水を索めて之を救はんとするも、帝預め左右に敕して餅罐を毀たしむれば、太后徒跣して井に趨くも、以て汲む無く、須臾にして遂に卒す。（曹丕）復た東阿を害せんと欲す。太后曰く、「汝已に我が任城を殺せり、復た我が東阿を殺すを得ざれ」と。（尤悔第三十三回）曹彰の死について、『三國志』卷十九・任城王傳は病死とし、同裴注『魏氏春秋』は憤死としている。同書卷十九・陳思王傳注『魏氏春秋』には、曹彰が突然「くなり、諸王は兄弟を思ふ悲痛な感情に囚われた」とある。このように、裴松之は曹彰の死に含みを持たせてはいるが、

『世説新語』の三國描寫と劉義慶

『世説』の伝える毒殺説は引いていない。『三國志』および裴注との比較から見えてくるこの逸話の獨目性は、弟・曹彰に對する曹丕の殘虐ぶりの強調と、弟を手ずから殺した曹丕への批判的筆致である。七步詩の故事と同様、曹彰毒殺説も『世説』の創作かもしれない。また同逸話で曹彰を殺した曹丕は、さらに曹植にも魔手を伸ばそうとし、母・卞太后から牽制されている。これもまた『三國志』および裴注に該當記述は見あたらない。曹植は『世説』に二度登場するが、いずれも曹丕に命を狙われる役回りとなっている。これは、曹植が二度にわたって危機を迎えたとも、同一事件が二箇所に記載されているとも解釋できるが、いずれにせよ、皇帝が執拗に文人氣質の皇弟の殺害を謀ったことを強調する筆致になっていることは疑いない。『世説』は、曹丕の皇弟迫害を大幅に水増しして傳えているのである。

このような曹丕描寫を、既に見た劉義慶と文帝の關係と併せて考えると、『世説』の曹丕が文帝の投影であることが讀み取れる。無論、曹丕による皇弟迫害は根も葉もない『世説』の捏造ではなく、既に『三國志』および裴注に少なからず記載がある。それゆえに『世説』は曹丕を劉宋文帝の投影先として選んだのであろう。だが『世説』の曹丕像は、『三國志』や裴注といった先行書の傳える度合いを遙かに越え、執拗に弟の命を奪おうとし、實際に毒殺までしてしまう點が大きな特色となっている。

(一) 卞太后と會稽長公主

『世説』の曹丕が劉宋文帝の投影であると思わせる大きな特徴を、今一つ擧げてみよう。『世説』の曹丕描寫において、皇弟迫害と並んで特徴的なのは、非道行爲を母から度々叱責されていることである。曹彰を毒殺し、曹植をも手にかけようとする曹丕に對し、母・卞太后

が牽制の言葉を放ったことは前述した。また『世説』には、以下のよ  
うな逸話も見える。

魏武帝（曹操）崩ずるや、文帝悉く武帝の宮人を取りて自侍  
せしむ。帝の病 困なるに及びて、卞后 出でて疾を看る。太后  
戸に入り、直侍を見るに並びに是れ昔日愛幸せし所の者なり。太  
后問ふ、「何れの時 來りしや」と。云く、「正に伏魄の時に過る」  
と。因りて復た前まずして、歎じて曰く、「狗鼠も汝が餘を食ら  
はじ。死は故より應に爾るべし」と。山陵に至るまで、亦た竟に  
臨せず。（賢媛第十九回）<sup>20</sup>

曹丕が、父・曹操の服喪期間にも拘わらず父の愛妾を總て我が物とし  
たことを知った卞太后が、曹丕に壯絶な罵倒を浴びせ、彼の葬儀にお  
いても哭泣しなかった、というのである。

卞太后が我が子の中で曹植を最も愛したこと、そのために曹丕が曹  
植を誅殺しなかったことは記載がある（『三國志』卷十九・陳思王傳、  
および同注<sup>20</sup>）。だが、卞太后は實子・曹丕が太子と決まっても喜色を  
表に出さなかったというのが（『三國志』卷五・武宣卞皇后傳）、『世説』  
の伝えるような曹丕への嫌惡的態度は、『三國志』や裴注には特に記  
載が無い。人道に悖る行爲を働いた我が子・曹丕に對する、「犬や鼠  
すらお前の食べ残しを喰らおうとはすまい。死んで當たり前だ」とい  
う卞太后の凄まじい罵倒（賢媛第十九回）は、『漢書』卷九十八・元  
后傳に見える元后の言葉が典據であるという<sup>20</sup>。これも『三國志』およ  
び裴注、そして劉孝標注のいずれにも採録されぬ逸話であることから、  
元后の故事を元に『世説』がこの卞太后の言葉を創作したと見るべき  
である。曹丕の葬儀における卞太后の舉動に關しても、特に記述は無  
い。卞太后の曹丕に對する否定的態度と思しきものには、曹植が曹丕

に謝罪せんとした逸話がある。すなわち、「曹植が自殺したと誤解し  
た卞太后は曹丕に向かつて泣き出し、そこに現れた曹植を見た曹丕と  
太后は非常に喜んだ。だが曹植と謁見した曹丕の態度が依然冷淡であ  
つたため、太后が不機嫌となつた」というものである（『三國志』卷十  
九・陳思王傳注「魏略」）。かかる記述が既にあつたればこそ、『世説』  
撰者は曹丕が太后に強く詰られるという設定を想起し得たのであろう。  
だが、『世説』の伝えるような、卞太后の曹丕に對する罵倒や嫌惡と  
いった記述は、『三國志』や同裴注、および『世説』劉孝標注のい  
ずれにも見あたらない。曹丕の皇弟迫害描寫同様、卞太后の我が子・曹  
丕に對する否定的態度もまた、『世説』の潤色が認められよう。

ここで想起されるのは、劉宋文帝の異母姉・會稽長公主である。彼  
女と文帝に關する興味深い史料がある。

會稽長公主は、兄弟に於て長爲りて、太祖（文帝）の至りて親  
敬する所なり。義康の南上して後、之を久しくして、上嘗て主  
に就きて宴集して甚だ歡ぶに、主起ちて再拜稽顙し、悲しみて  
自ら勝へず。上其の意を曉らずして、自ら起ちて之を扶く。主  
曰く、「車子 歲暮には、必ず陛下の容るる所と爲らざらん。今  
特に其の生命を請ふ」と。因りて慟哭す。上流涕して、手を擧  
げ蔣山を指して曰く、「必ず此の慮無し。若し今の誓ひに違はば、  
便ち是れ初寧陵に負くなり」と。即ち飲む所の酒を封じて義康に  
賜ひ、并せて書して曰く、「會稽姊 飲宴にて弟を憶ひ、餘る所の  
酒を今封送す」と。车子は、義康の小字なり。（『宋書』卷六十  
八・彭城王義康傳）<sup>20</sup>

會稽長公主は、皇弟・劉義康を迫害する劉宋文帝に對し、涙ながらに  
弟・義康の助命を嘆願し、文帝はこれに應じているのである。また會

稽長公主は文帝に對し、罵倒を交えた懇願も行っている。

會稽公主 身は長嫡に居りて、太祖の禮する所と爲り、家事の大小は、必ず咨りて而る後に行ふ。……忽として意を得ざる有れば、輒ち號哭し、上甚だ之を憚る。初め、高祖（劉裕）微しき時、貧陋過甚たり、嘗に自ら新洲に往きて荻を伐るに、納布衫襖等の衣有り、皆敬皇后手自づから作るものなり。高祖既に貴たるや、此の衣を以て公主に付して曰く、「後世若し驕奢にして節せざる者有らば、此の衣を以て之に示す可し」と。（徐）湛之大將軍彭城王義康の愛する所と爲り、劉湛等と頗る相附協す。劉湛の罪を得るに及ぶや、事は湛之に連なり、太祖大いに怒りて、將に大辟に致さんとす。湛之憂懼するも計無く、以て公主に告ぐ。公主即日宮に入り、既に太祖に見ふや、因りて號哭して牀を下り、復た臣妾の禮を施さず。錦囊を以て高祖の納衣を盛り、地に擲ちて以て上に示して曰く、「汝の家は本もと貧賤なり、此れ是れ我が母が汝の父の爲に此の納衣を作れるなり。今日一頓の飽食有らば、便ち我が兒子を殘害せんと欲するか」と。上も亦た號哭し、湛之此れに由りて全きを得るなり。（『宋書』卷七十一・徐湛之傳）

文帝は、劉湛の謀叛に連坐した徐湛之を處刑しようとしたとき、會稽長公主（徐湛之の母に當たる）から叱責され、徐湛之を助命しているのである。以上のような會稽長公主の文帝への言葉は、『世説』における卞太后の曹丕への言葉と酷似していることが看取できよう。すなわち、『世説』の卞太后は、會稽長公主を想起させる存在なのである。加えて、會稽長公主と卞太后はいずれも、貧賤の出自であり、儉約を以て知られた人物である。こういった類似点からも、卞太后は會稽長

公主を投影するのに、より相應しい人物であった。

(三)「任城」と劉義慶

ここで、曹彰を毒殺した曹丕に對し卞太后が放った、「お前は以前に我が任城（曹彰）を殺した。この上東阿（曹植）を殺すことはならぬ」という言葉を今一度見てみよう。單純に文帝の皇弟迫害を語る言葉と理解しても差し支えないが、「任城」の語に注意してみたい。前述のように、曾て劉裕は、劉義慶を「此我家豐城也（此れ我が家の豐城なり）」と評した（『宋書』劉義慶傳。『南史』には該當記述無し）。大橋由治は、豐城にて寶劍が発見されたという『晉書』卷三十六・張華傳の故事を引き、「豐城」を傑出した人物を見出す比喩と理解する。だが、その張華傳によると、その寶劍は干將・莫邪という二本一組の名劍で、うち干將のみを手にした張華が非業の最期を遂げて後、この二本の劍は水中に没し龍に姿を變え、劍は失われたとある。干將・莫邪ともに單體で名を擧げられる事例もあるが、『晉書』張華傳に見える寶劍が二本一組の扱いである以上、劉義慶をこの寶劍に比しているとするならば、劉義慶と對で賞贊される人物が必要であろう。だが少なくとも『宋書』には、これに該當する人物が記載が無い。そもそも、一族の有望な若者を、手にした者が三族皆殺しになったという不吉な劍に比するというのは考え難い話である。では「豐城」の意味するところは何であろうか。

『南齊書』卷三十五・長沙威王晃傳には「太祖常曰、「此我家任城也」（太祖常に曰く、「此れ我が家の任城なり）」とあり、『梁書』卷二十九・廬陵威王續傳には「高祖常歎曰、「此我之任城也」（高祖常に歎じて曰く、「此れ我が任城なり）」とある。任城王曹彰は、武に秀でた曹操の子である。蕭道成や蕭衍ら南朝の皇帝は、自らを曹操に比し、

武に秀でた若き皇族を曹彰に比したのである。劉裕の劉義慶評は、この二つの表現と酷似している。<sup>②③</sup>となれば、劉裕の言葉は本來は「豊城」ではなく「任城」だったのではあるまいか。文人氣質で知られる劉義慶だが、若き日の彼は「少善騎乘」と記され、長安攻撃に従軍するなど、武人的側面が強い。曹彰に比されるに相應しい人物である。以上のことから、劉裕が劉義慶を「我が一族の曹彰である」と評した可能性が指摘できよう。となれば、卞太后の曹丕に對する「汝已殺我任城、不得復殺我東阿」という罵倒は、大きな意味を持つことになる。解釋は二通り考えられる。一つは、文字通り任城王曹彰（すなわち劉義慶）を殺した、とするもの。もう一つは、任城を事實上死に體にした、つまり、劉義慶が曹彰のような武を發揮できぬよう追い込んだ、とするものである。

一つめから檢證してみよう。劉義慶は赴任先で病を患い、許されて都に戻って病死したと『宋書』劉義慶傳は傳える。だが、文帝の皇弟迫害は既に劉義康という前例があり、既に見たように劉義慶自身、身の危険を感じていた。しかも劉義慶は以前、當初は文帝が後繼となる筈であった劉道規の後繼となっている。文帝が劉義慶に對し穩やかならぬ感情を抱くには十分な理由である。となれば、事實關係はともかく、劉義慶の門人たちが、パトロンが文帝によって死に迫いやられたと見た可能性は否定できない。<sup>④</sup>前述の通り『世説』は、曹丕が「任城」こと曹彰を實際に殺した、という潤色を施したと思しき節がある。もし『世説』撰者が劉義慶の死に文帝の影を見ていたならば、曹丕に對する卞太后の言葉は、文帝の劉義慶殺害を詰る内容を有することになる。ただしこの場合、『世説』の最終的成立を劉義慶死後に措定せねばならないという難點がある。

續けて、二つめの解釋について考えてみよう。前述の「少善騎乘、及長、以世路艱難、不復跨馬」という劉義慶の變貌が、文帝の迫害を免れる爲の處世術であった場合、劉義慶は文帝によって任城たることを放棄したことになる。そして荊州刺史としての彼は、多くの門人を集めた文人王であった。言うなれば、東阿王曹植に近い氣質が前面に出たことになる。つまり、任城としての劉義慶は文帝により死に體たるを強いられ、保身のために東阿となったのである。こうして見ると、卞太后の曹丕への、「汝已殺我任城、不得復殺我東阿」という言葉は、「お前は劉義慶の武人生命を絶った。せめて文人となった劉義慶には天壽を全うさせてやれ」という、懇願にも似た牽制の言葉としても理解できよう。

いずれにせよ、『世説』の卞太后の言葉は、會稽長公主の劉宋文帝への言葉を餘りにも生々しく想起させるため、卞太后に罵倒される曹丕は、劉宋文帝をより明確に想起させる存在になっている。「任城」の語は、それを更に強める役割を果たしているのである。

以上三點にわたって述べてきたように、『世説』の曹丕描寫には、劉宋文帝の投影であると思わせる要素が強く看取できる。無論、曹丕の『世説』登場数は十回と決して多くはないから、これを以て『世説』全體の性格を論ずることはできない。だが、既に檢證してきたように、『三國志』の傳える酷薄な曹丕像が、『世説』により更に強められたことは疑いない。<sup>⑤</sup>かかる『世説』の曹丕描寫は、文帝の影に怯える「皇弟」劉義慶の意圖が、同書の編纂に大きく關與していたことを物語っている。當然ながら、『世説』編纂の實作業には、劉義慶幕下の文人たちが參與したであろうし、彼らの思想も色濃く反映されているであろう。<sup>⑥</sup>多くの人の手によって成立したればこそ、『世説』全體を貫徹

する思想の看取は難しい。だが、同書編纂の號令を發したのが劉義慶であり、その動機に彼の境遇が大きく影を落としていることは間違いないであろう。

#### 四、司馬炎への批判的筆致と『晉書』

『世説』において、皇帝による皇弟迫害への批判が讀み取れるのは、曹丕描寫だけではない。劉宋文帝は、皇弟迫害と皇子重視政策を強力に推進したが、これを想起させる事例が、『世説』編纂期からさほど遠くない時代に起こっていた。西晉武帝・司馬炎と、司馬攸をめぐる一件である。賢弟・司馬攸を廢して愚息・司馬衷を後繼とし、亡國を招いたことで知られる司馬炎に對する、『世説』の描寫を以下に見よう。

方正第五〇九に、出來の悪い我が子を後繼にしたい司馬炎が和嶠に對し、皇太子の様子を見てくるよう言いつけ、和嶠が「皇太子は相變わらずです」と答える逸話が見える。これは弟を廢して長子を立てんとする皇帝を誡める和嶠の毅然とした態度を讀める逸話である。また規箴第十〇七には、司馬衷が帝位を繼承することを嘆いた衛瓘が、酔ったふりをして玉座を軽くたたきながら「この座が惜しい」と述べた逸話がある。衛瓘の眞意を悟った司馬炎はしかし、この衛瓘の言葉を酒の上のものとして濟ませ、取り上げなかった。あくまで愚息に位を傳えんと頑なな司馬炎像が提示されているのである。

他にも司馬炎は孫皓・諸葛靚らにやりこめられる存在として登場し、肯定的逸話は見えない。賢弟を斥け愚息を立てんとする司馬炎への批判的筆致は比較的明確である。『世説』の司馬炎は劉宋文帝的投影であり、實子の偏愛と皇弟の迫害が亡國につながるのだ、という筆致で

あると解釋できよう。

また、王濟が淮南厲王・劉長の故事を引き、司馬炎の司馬攸に對する態度を暗に詰った逸話は興味深い。劉長は漢文帝的弟で、謀叛のことで捕らえられ、恥じて餓死した人物である。劉義慶死後のことであるが、范曄の謀反によって安成に左遷された劉義康は、劉長の故事を讀み慨嘆したという。劉義康は自らを劉長に比し、皇弟の悲運を嘆いたのである。これを考えたとき、劉長の故事を通して司馬炎の皇弟迫害を批判的に記載する逸話が『世説』に見えることは、示唆的という他無い。

弟の扱いを正面から論じた逸話としては、品藻第九三二がある。

時人 共に論ず、晉武帝の齊王を出すと惠帝を立つると、其の失孰れか多きと。多く謂へらく、惠帝を立つるを重しと爲す。

桓温曰く、「然らず。子をして父の業を繼がしめ、弟をして家の祀を承けしむ。何の不可か有らん」と。

同逸話は、皇子重視政策を推進し、劉義康を都から追った文帝の方針そのままも見える司馬炎の處置を、桓温の言葉を借りてわざとらしく肯定している。この桓温の言葉に對する『世説』撰者の評は見えないが、劉孝標は「司馬炎が禍を招いたことは、奴隸ですら知っている。まして桓温という優れた人物がこれを知らぬはずは無く、この言は誤りである」と注を施している。かかる記載を『世説』が盛り込んだ理由として考えられるのは、文帝に對する辯解である。後述のように同書は、皇帝の御覽に供するために編まれた書ではない可能性が高いが、それでも文帝に同書の存在を知られる可能性はある。かかる事態の折には、この逸話を出して言い譯をすることが可能となる。或いは、劉義慶の外鎮の希望を許可した文帝への、ささやかな肯定的姿勢かもしれない。



れない。また、劉孝標注が端的に示すように、司馬炎の處置は、奴隸ですら失策と見なすというのが實態であった。従って、餘りにあからさまな阿諛とも取れる同逸話は、文帝への辯解になると同時に、司馬炎の賢弟・愚息への處置の兩方が失策であったと讀者に印象づける效果すら期待できるのである。

上述の衛瓘や和嶠の逸話は、唐修『晉書』にも採録され（『晉書』卷三十六・衛瓘傳、同書卷四十五・和嶠傳）、廣く知られている。だがこの『晉書』は、記述の信憑性に對し疑義が呈せられることが多い。早くも唐の劉知幾は、「皇家編纂の『晉書』は、『世説』の記述を多く採録し、康王（劉義慶を指す）の妄言を多く採録している」と手厳しく批判する（『史通』卷十七・諸晉史）。だが、この御撰『晉書』の描く「司馬炎が賢弟・司馬攸を憤死せしめ、愚息を廢さなかつたことが亡國を招いた」という「史實」には、皇太子である兄を殺して帝位を奪取した弟・李世民の自己辯護の影が感じられるという。『晉書』が、かかる目的のために『世説』を多く引いたのなら、『晉書』撰者の目は確かであったと言えよう。魯迅が『中國小説史略』（前掲）で『世説』を取り上げて以來、『世説』は小説として理解されるのが一般的であったが、昨今では『世説』を史料として捉えるべきであるとすする説も見られる。『世説』が現代の表現でいう「小説」の定義に合致する書であるか否かは論の分かれるところであろう。だが、劉孝標の注が、『世説』の記述の事實檢證や他説引用といった、裴松之の『三國志』注と極めて類似した性質を持つことや、唐修『晉書』が多く『世説』に依っていること、劉知幾が『史通』において批判的とはいへ『世説』を取り上げていることは、少なくとも『世説』が成立より唐代ころには史書として讀まれていたことを示す。皇弟の悲劇を強調

すべく、曹丕・司馬炎らの否定的人物像を強めるという目的を達したという點において、史書としての『世説』は成功を収めたのである。

##### 五、『世説』の編纂時期と劉義慶

上述のように『世説』からは、皇帝から迫害される皇弟の苦衷が少なからず見て取れる。だが『宋書』には、劉義慶が『徐州先賢傳』を編纂して奏上し、班固『典引』を擬して『典敍』を著し「皇代之美」を述べたことが明記されているのに、『世説』は奏上どころか、彼が編纂したという事實すら『宋書』からは確認できない。畢竟、『世説』の著作權を本當に劉義慶に付與できるか、という疑問も生じよう。劉義慶に代わり『世説』撰者として想起しうるのは、文帝によって死を賜った皇弟・劉義康とその門下である。だが、義康本人に文人氣質が無く、また彼が貴族に對して冷淡であったことを考えると、貴族の自律性を強調する『世説』の特色と義康の方針は合致しない。やはり『世説』撰者の名が劉義慶となっているのは、妥當と考えられる。『徐州先賢傳』や『典敍』の編纂作業が文帝のご機嫌取りのための作業であったことは想像に難くない。一方、『宋書』に『世説』の名が見えぬことから、同書が祕密裏に編まれた書とまではいかぬにせよ、少なくとも皇帝への迎合のため、皇帝の御覽に供するために編纂された書ではない可能性が考えられる。

では、『世説』の編纂・成立はいつ頃であろうか。これには諸説あるが、劉義慶が江州にいた初期の元嘉十六・十八年とする説が有力である。これは劉義康が失脚して江州へ追われ、義康・義慶の兩者が對面し涙しあった（前述）という元嘉十七年とほぼ一致する。このことは、文帝による劉義康への一連の迫害が、劉義慶が『世説』編纂を志

した直接の動機となった可能性を示唆しよう。

『世説』編纂はいつまで續いたか。これは現存する史料から見て断定は難しいが、些か検討してみたい。寧稼雨前掲論文は、劉義慶が晩年佛教に傾倒したことを根據に、『世説』編纂は義慶の晩年までは續かなかつたとする。だが、パトロン本人が佛教に傾倒していても、門人たちが『世説』編纂を突然停止したとは限らない。また、劉義慶の佛教傾倒が輒晦だったとすれば、尙更話は變わってくる。前述のように、『世説』は文帝の目に止まらぬことを前提に編纂された書であった可能性が高い。となれば、劉義慶が佛教への傾倒を装いつつ『世説』編纂を續行した可能性が指摘できよう。更に言うならば、これも既に觸れたように、都で病死した劉義慶の死因について、(事實關係はともかく)その門人たちが文帝の處置を見出したとするならば、パトロンを非業の最期に追いやった文帝に對する批判の書としての『世説』という理解も成立し得る。ひよっとすれば、パトロンの死後にも、その門人たちの手で部分的な改訂や追加が行われた、或いは細々ながら編纂そのものが續いたかもしれない。

### おわりに

『世説』の傳える皇帝および皇弟像と、同書の映し出す「元嘉の治」の内情について檢證してきた。後世「元嘉の治」と讃えられる治世は、劉宋皇族の血塗られた歴史の端緒となった時代でもあった。皇弟に等しい存在であった劉義慶は、文帝が自ら拔擢した弟・劉義康を迫害する様子を目の當たりにし、自らにも迫害が及ぶことを恐れ、武の道を放棄し、文人王として生きることを餘儀なくされた。『世説』はかような情勢を反映している。同書は、劉宋文帝が皇弟を迫害する様子を、

曹丕や司馬炎といった皇帝の姿を借りて生々しく傳えている。小説として讀まれるのが一般的な『世説』は、このような同時代史的品格をも有しているのである。そしてそこには、「皇弟」劉義慶の苦衷が投影されている。魯迅以來、『世説』の編纂には、劉義慶幕下の文人たちの役割を重視する傾向があり、劉義慶本人の意圖は輕視されがちであった。確かに、編纂の實作業に劉義慶門下の文人が參與したであろう。だが、『世説』に描かれた「皇弟」迫害を行う皇帝、そして「皇弟」の苦境からは、文帝の影に怯える「皇弟」劉義慶の意圖が、『世説』の編纂に少なからず關わったであろうことを窺い知ることができるのである。

『世説』の提示する人物像は、『世説』の本來の意圖を越えて展開していった。その記述は、皇弟稱揚を目的とする李世民の意圖と奇しくも合致し、唐修『晉書』に多く採録された。またよく知られているように、その反曹の要素を中心として、『三國志演義』に數多くの材料を與え、廣く流布していくこととなる。

### 注

- (1) 本論では四部叢刊版を底本とする。また、本論で『世説新語』における逸話を示す場合、「言語第二〇八」という形式の表記を採る。この場合は、「言語第二の八話目」の意味である。なお同書の書名は『隋書』經籍志では『世説』である。『四庫全書總目提要』によると、『世説』の名は劉向著『世説』から採り、劉向の書と區別するべく『世説新書』となり、やがて『世説新語』となったという。本論で用いる『世説』の略稱は、劉向著の書名ではなく、『世説新語』を指すことを明言しておく。なお同書の原名について、松岡榮志『世説新語』の原名について「(伊

藤漱平教授退官記念中國學論集』汲古書院、一九八六年）は、やはり『世説』が原名と考えて良いと説く。

(2) 『隋書』卷三十四・經籍志・小説家類に「世説八卷 宋臨川王劉義慶撰」とある。

(3) 例外として、『南史』卷十三・臨川烈武王劉道規傳附・劉義慶傳には、「所著世説十卷、撰集林二百卷、並行於世」とある。ただし『南史』の成立は唐代、『隋書』より若干後とされている。となれば、『南史』が『世説』を劉義慶撰としているのは『隋書』經籍志を典據としている可能性が考えられる。

(4) 魯迅『中國小説史略』人民文學出版社、一九七五年、第七篇「世説新語與其前後」。

(5) 「三國志文化」の概念とその意義、および六朝期の三國正統論については、田中靖彦「漢晉春秋」に見る三國正統觀の展開」(『東方學』百十、二〇〇五年)を参照。

(6) なお、『世説』の取材資料については、阿部泰記「世説新語の取材資料について—魯迅説に對する疑問提起—」(『山口大學文學會誌』三四、一九八三年)、岡本洋之介「世説新語」と先行書」(『佛教大學大學院紀要』二八、二〇〇〇年)ほかを参照。

(7) 川勝義雄「世説新語」の編纂をめぐる『東方學報』四一、一九七〇年。のち、川勝義雄『六朝貴族制社會の研究』岩波書店、一九八二年に「世説新語」の編纂—元嘉の治の一面—として収録。川勝義雄『魏晉南北朝』(講談社、二〇〇三年)も参照。なお、土屋聰「世説」の編纂と劉宋貴族社會」(『中國文學論集』三三、二〇〇四年)は、『宋書』劉義慶傳に見られる劉義慶の官歴を根據に、劉義慶が政治的に不遇であったとは考え難いと説き、川勝説を否定する。だが、劉義慶の苦境は後述の通りである。

(8) 矢淵孝良「世説の撰者について—語林との相違に見る世説撰者の立

場—」(川勝義雄・砺波護編『中國貴族制社會の研究』京都大學人文科學研究所、一九八七年)、同「袁淑と『世説』—『世説』の撰者について」補論」(『言語文化論叢』三、一九九九年)。

(9) 周一良「關於『世説新語』的作者問題」『清華大學學報哲學社會科學版』二〇〇六一。

(10) 安田二郎「元嘉時代史への一つの試み—劉義慶と劉劭の事件を手がかりに—」『名古屋大學東洋史研究報告』二、一九七三年。のち「元嘉時代政治試論」として安田二郎『六朝政治史の研究』(京都大學學術出版會、二〇〇三年)に収録。

(11) 寧稼雨「劉義慶的身世境遇與『世説新語』的編纂動因」『湖北大學學報(哲學社會科學版)』二七一、二〇〇〇年。

(12) 例えば、川勝の『世説』論の中核を成す謝靈運は、『世説』に一條しか登場せず、矢淵に論據の薄弱さが指摘されている。

(13) 「烏夜啼」、宋臨川王義慶所作也。元嘉十七年、徙彭城王義康於豫章。義慶時爲江州、至鎮、相見而哭、爲帝所怪、徵還宅、大懼。」とある。寧稼雨前掲論文は、「徵還宅」は「徵還京」の誤りではないかと指摘する。

(14) 八年、太白星犯右執法、義慶懼有災禍、乞求外鎮(八年、太白星右執法を犯し、義慶 災禍有らんことを懼れ、外鎮せんことを乞求す。『宋書』劉義慶傳)

(15) 『宋書』六十八・南郡王義宣傳に、「初、高祖以荊州上流形勝、地廣兵強、遣詔諸子次第居之。謝晦平後、以授彭城王義康。義康入相、次江夏王義恭。又以臨川王義慶宗室令望、且臨川武烈王有大功於社稷、義慶又居之(初め、高祖 荊州は上流の形勝にして、地 廣く兵 強きを以て、遣詔もて諸子をして次第もて之に居らしめんとす。謝晦平らぐるの後、以て彭城王義康に授く。義康 入りて相たるや、江夏王義恭をして次がしむ。又 臨川王義慶は宗室の令望にして、且つ臨川武烈王の社稷に大

功有るを以て、義慶をして又之に居らしむ」とある。

(16) 吉川忠夫「史家范曄の謀反」(『歴史と人物』一九七二—一)を参照。范曄らの謀反の経緯のみならず、文帝の抑壓を受ける劉義康の苦境などについても詳しい。

(17) 趙翼『廿二史劄記』卷十一「宋子孫屠戮之慘」に、「宋武九子、四十餘孫、六七十曾孫、死於非命者十之七八」とある。

(18) 文帝嘗令東阿王七步中作詩、不成者行大法。應聲便爲詩曰、「煮豆持作羹、漉菽以爲汁。其在釜下燃、豆在釜中泣。本自同根生、相煎何太急。」帝深有慚色。

(19) 七步詩については、八木澤元「七步詩管規」(『二松學舎大學論集』昭和四十八年度號、一九七四年)を参照。同論では、同詩は曹植の作ではないとし、口傳による逸話を劉義慶が『世説』に収録したと説く。また同論は、元來『世説』が採録していた七步詩の逸話は、現在の『世説』に見えるそれとは異なっている、とも説く。

(20) 裴松之は劉義慶と同じく劉宋文帝期の人で、『三國志』裴注は元嘉六(四一九)年に完成している。『世説』成書の時期については後述するが、元嘉十六〜十八年と言われている。

(21) 『太平御覽』卷六百・文部十六では、七步詩の故事の出典を「魏志」すなわち『三國志』に求めている。ただし同部分の記述は、途中までは現行『三國志』卷十九・陳思王傳に該當部分があるが、七步詩に該當する部分のみが現行『三國志』には見あたらない。また、劉孝標の『世説』注は、七步詩の逸話に魏志(『三國志』)に見える曹植の文才を引用しているが、やはり七步詩を作ったという内容は見えない。断定はできないが、『太平御覽』は、本來は『三國志』に見えない七步詩に關する記述も含め、まとめて「魏志曰」として扱った可能性が指摘できる。とまれ、岡本洋之助『世説新語』と先行書(『佛教大學大学院紀要』二八、二〇〇〇年)が指摘するように、同逸話に關する『世説』と『太平御覽』

卷六百の引く『魏志』引用の最大の差異は、曹丕の態度である。後者が「善之」であるのに對し、『世説』では「有慚色」と、曹丕が曹植より劣ると讀者に印象づける描寫になっている。

(22) 魏文帝忌弟任城王驍壯。因在下太后閣共圍棊、竝噉棊、文帝以毒置諸棊中、自選可食者而進。王弗悟、遂雜進之、既中毒、太后素水救之、帝預救左右毀餅罐、太后徒跣趨井、無以汲、須臾遂卒。復欲害東阿。太后曰、「汝已殺我任城、不得復殺我東阿。」

(23) 曹丕と劉義隆の諍はいずれも文帝である。だがこのことは、『世説』が曹丕を劉義隆の投影として選んだ理由とは考え難く、偶然の一致と見るべきであろう。諍は死後に贈られるものであり、『世説』の完成時、劉義隆はまだ健在だったと思われるからである。

(24) 魏武帝崩、文帝悉取武帝宮人自侍。及帝病困、下后出看疾。太后入戶、見直侍竝是昔日所愛幸者。太后問、「何時來邪？」云、「正伏僽時過。」因不復前、而歎曰、「狗鼠不食汝餘。死故應爾。」至山陵、亦竟不臨。

(25) 曹植が法を犯した時、卞太后が曹丕に「私のために國法を壞すことはならん」と傳えたという記述もある(『三國志』卷五・武宣卞皇后傳注『魏書』)。だが裴松之は、これに疑義を呈している。

(26) 目加田誠譯『新釋漢文體系78 世説新語』(下) 明治書院、一九七八年。

(27) 曹丕の葬儀において禮に缺けるところがあったと思わせる記述が残っているのは卞太后ではなく、曹丕の子・曹叡である。『三國志』卷二・文帝本紀注『魏氏春秋』に、曹叡は「送葬」すなわち埋葬のため墓所に送るべきところを、暑さを理由に曹眞らが諫止したため、取りやめたところがある。

(28) 會稽長公主、於兄弟爲長、太祖至所親敬。義康南上後、久之、上嘗就主宴集甚歡、主起再拜稽顙、悲不自勝。上不曉其意、自起扶之。主曰、「車子歲暮、必不爲陛下所容。今特請其生命。」因慟哭。上流涕、舉手指

蔣山曰、「必無此慮。若違今誓、便是負初寧陵。」即封所飲酒賜義康、并書曰、「會稽姊飲宴憶弟、所餘酒今封送。」車子、義康小字也。

- (29) 會稽公主身居長嫡、爲太祖所禮、家事大小、必咨而後行。……忽有不得意、輒號哭、上甚憚之。初、高祖徵時、貧陋過甚、嘗自往新洲伐荻、有納布衫襖等衣、皆敬皇后手自作。高祖既貴、以此衣付公主曰、「後世若有驕奢不節者、可以此衣示之。」湛之爲大將軍彭城王義康所愛、與劉湛等頗相附協。及劉湛得罪、事連湛之、太祖大怒、將致大辟。湛之憂懼無計、以告公主。公主即日入宮、既見太祖、因號哭、下牀、不復施臣妾之禮。以錦囊盛高祖納衣、擲地以示上曰、「汝家本貧賤、此是我母爲汝父作此納衣。今日有一頓飽食、便欲殘害我兒子。」上亦號哭、湛之由此得全也。

- (30) 前述のように、劉宋の祖・劉裕は貧賤で、衣裝も妻の手作りであった。劉裕はその衣を會稽長公主に與え、一族の贅澤者を戒めるように託されている(『宋書』卷七十一・徐湛之傳)。卞太后は倡家の出身であり、富貴の身分となっても儉約を旨としていた(『三國志』卷五・武宣卞皇后傳、および同注『魏書』)。

- (31) 大橋由治「劉義慶傳(『宋書』卷五十一・列傳第十一宗室)譯注」『大東文化大學漢學會誌』四一、二〇〇三年。

- (32) 更に言うならば、齊の武帝は、文才のあった我が子・蕭子隆を「我家東阿也(我が家の東阿なり)」と讃えている(『南齊書』卷四十・隨郡王子隆傳)。東阿とは曹植を指す。かかる「我が家の○○○」という表現は、人名(特に皇族)の「○○王」を指すのが一般的であると理解するのが自然であろう。「豐城」を寶劍の比喩と理解せぬ所以である。

- (33) 「任城」が「豐城」と誤記された理由は、地名から來る混同に加え、曹彰の兄・豐愍王曹昂との混同が考えられる。

- (34) 注(13)に引いた『舊唐書』の記述および寧稼雨の指摘を考えると、

都への歸還は劉義慶の希望ではなく、劉義康と會見した劉義慶を疑った文帝の命令であったと見ることも可能である。となれば、劉義慶の死にも文帝の影が見えてくることになる。

- (35) 渡邊由美子「曹操没後の曹丕と曹植 不仲説の檢證」(『二松』一六、二〇〇二年)によると、曹丕と曹植は不仲ではなく、むしろ良好な關係にあったという。また、津田資久「魏志」の帝室衰亡敘述に見える陳壽の政治意識(『東洋學報』八四—四、二〇〇三年)によると、曹丕・曹植の後繼者争いに關する描寫には、陳壽の作爲が入っているという。

- (36) 曹丕が王粲の葬式において、彼の好きだった驢馬の鳴き眞似をするよう提案した逸話(傷逝第十七01)は、曹丕を好意的に扱ったと解釋しうる唯一の事例である。だがこれは、傷逝第十七03に見える孫楚と王濟の逸話に酷似している。王濟の葬儀にて驢馬の鳴き眞似をした孫楚が參列者の笑いを呼んだと明記してあることや、驢馬が良い意味で語られることの少ない動物であること(『三國志』卷六十四・諸葛恪傳に見える「諸葛子瑜之驢」の逸話が好例)を考えると、傷逝第十七01は、失笑を買った孫楚の行爲を曹丕に換骨奪胎したものである可能性が高い。黒田眞美子「魏晉の悲愴——『世說新語』傷逝篇を中心として——(佐藤保・宮尾正樹編『ああ 哀しいかな—死と向き合う中國文學—』汲古書院、二〇〇二年)も参照。

- (37) 川勝義雄は、魯迅説を受け、劉義慶の元に集った四名の文人、袁淑・陸展・何長瑜・鮑照の四人のいずれかが同書編纂に携わった可能性を指摘する。その上で川勝は、『世説』に一條登場する謝靈運に着目し、彼と親しかった何長瑜が編纂にタッチした可能性があると説いた。また矢淵孝良は袁淑に注目する。かかる指摘のあるように、劉義慶門下の文人たちが『世説』編纂に果たした役割が小さくないことは確かであろう。

- (38) 本論の關心、とりわけ曹丕描寫との關連から注目に値する劉義慶幕下の文人は、鮑照である。鮑照は何長瑜と同じく東海の人であるが(『宋

書』劉義慶傳)、この東海郡剡縣の鮑氏は、漢の大尉鮑豆の子・鮑徳が東海に住んだことから始まり、永嘉の亂に長江を渡り、丹陽に住まいしたという(『元和姓纂』卷七)。鮑照はこの一族であろう。この東海鮑氏の祖・鮑徳は、鮑宣という曾祖父を持つ(『後漢書』列傳十九・鮑永傳)。この鮑宣の九世孫とされるのが、三國魏に仕えた鮑勛である(『三國志』卷十二・鮑勛傳)。従って鮑照と鮑勛とは、鮑宣を共通の祖として持つ同族ということになる。この鮑勛は、曹操に盡くし戦死した鮑信の子で、崩御直前の曹丕に處刑された人物である。『世説』における曹丕が、皇弟迫害を行う劉宋文帝の投影として選ばれ、『三國志』などの傳える度合いを超えて親族彈壓を實施した皇帝として描寫される理由として、鮑照が『世説』編纂に参加していた可能性が指摘できよう。

(39) 和嶠爲武帝所親重、語嶠曰、「東宮頃似更成進、卿試往看。」還問、「何如。」荅云、「皇太子聖質如初。」(和嶠武帝の親重する所と爲り、嶠に語りて曰く、「東宮頃更に成進するに似たり、卿試みに往きて看よ」と。還りて問ふ、「何如」と。荅へて云く、「皇太子の聖質初めの如し」と。)

(40) 晉武帝既不悟太子之愚、必有傳後意。諸名臣亦多獻直言。帝嘗在陵雲臺上坐。衛瓘在側、欲申其懷、因如醉、跪帝前、以手撫牀曰、「此坐可惜。」帝雖悟、因笑曰、「公醉邪。」(晉武帝既に太子の愚を悟らず、必ず後を傳へんとの意有り。諸々の名臣も亦多く直言を獻ず。帝嘗て陵雲臺上に在りて坐す。衛瓘側に在りて、其の懷を申べんと欲し、因りて醉ふが如くして、帝の前に跪き、手を以て牀を撫して曰く、「此の坐惜しむ可し」と。帝悟ると雖も、因りて笑ひて曰く、「公醉へるや」と。)

(41) 晉へ降伏した孫皓が、司馬炎に擲擻され、詩で反撃する話が排調第二十五05に見える。諸葛靚は諸葛誕の息子で、父の敵である司馬昭の子・司馬炎に屈せぬ態度を貫き、司馬炎を恥じ入らせる話が方正第五10に見

える。

(42) また、賈充の二人の妻を比較し、司馬衷に嫁いだ娘を生んだ郭氏より、司馬攸に嫁いだ娘を生んだ李氏に軍配を上げる逸話(賢媛第十九14)のように、司馬衷派の人物を貶め、司馬攸派の人物を賞賛する傾向も『世説』には散見される。間接的に司馬攸を賞賛しているのである。

(43) 方正第五11に、「武帝語和嶠曰、「我欲先痛罵王武子、然後爵之。」嶠曰、「武子儻爽、恐不可屈。」帝遂召武子、苦責之、因曰、「知愧不。」武子曰、「尺布斗粟之謠、常爲陛下耻之。它人能令疎親、臣不能使親疎。以此愧陛下。」(武帝和嶠に語りて曰く、「我先に王武子を痛罵し、然る後に之に爵せんと欲す」と。嶠曰く、「武子は儻爽なれば、恐らくは屈す可からざらん」と。帝遂に武子を召し、苦だ之を責め、因りて曰く、「愧を知るや不や」と。武子曰く、「尺布斗粟の謠、常に陛下の爲に之を耻づ。它人は能く疎をして親ならしむるも、臣は親をして疎ならしむること能はず。此を持って陛下に愧づ」と。とある。「尺布斗粟之謠」について劉孝標は、『漢書』卷四十四・淮南厲王傳を引き、淮南厲王死後に民間で歌われた、「一尺の布や一斗の粟といった僅かなものですら分かち合えるのに、廣大な天下を以てしても兄弟相容れることはいかない」という内容の歌であると指摘する。和嶠は、淮南厲王の故事を引き、司馬攸に對する司馬炎の態度を責めているのである。

(44) 義康在安成讀書、見淮南厲王長事、廢書歎曰、「前代乃有此、我得罪爲宜也。」(義康安成に在りて書を読み、淮南厲王長の事を見るや、書を廢てて歎じて曰く、「前代に乃ち此れ有り、私の罪を得るは宜爲り」と。)(『宋書』卷六十八・彭城王義康傳)

(45) 時人共論、晉武帝出齊王之與立惠帝、其失孰多。多謂、立惠帝爲重。桓溫曰、「不然。使子繼父業、弟承家祀。有何不可。」

(46) 安田二郎「西晉武帝好色放」『東北大學東洋史論集』七、一九九八年。  
(47) 劉軍「世説新語」非小説論(『哈爾濱工業大學學報(社會科學版)』

二二二、二〇〇〇年六月、張松輝『世說新語』不是小説』、『湖南文理學院學報(社會科學版)』三〇一、二〇〇五年一月) ほか。

- (48) 『世説』の有する、かかる史書的性格は、『世説』は何故、皇帝批判という危険極まりないことを行ったのか」という疑問に對する説明ともなる。中國では古來、事實を直筆し、筆を枉げぬことを重視する傳統がある。崔杼の莊公弑殺を直筆し殺された春秋齊の太史兄弟の故事(『春秋左氏傳』襄公・傳二十五年)は餘りに有名である。また、司馬遷を代表として、悲運に見舞われた者、不遇をかこつ者が、史書執筆を通じて自らの心中を表明せんとした事例は多い。劉義慶もまた、多少の危険は覺悟の上で、劉宋文帝による皇弟迫害という史實を後世に伝えんとする、史書的な性格を『世説』に込めたのではあるまいか。ただし、『史記』武帝本紀が、武帝の逆鱗に觸れて削除されたと早くから見なされていたように(例えば『三國志』卷十三・王朗傳附・王肅傳に見える王肅の言葉)、餘りに直接的な内容では、記録そのものが後世に残らない危険があった。そこで『世説』は、「古を以て今を論ずる」という手法を用いたのであろう。かかる手法は、劉知幾『史通』でも用いられている。拙稿「唐代における三國正統論と『史通』—曹魏描寫に込められた劉知幾の唐朝觀—」(『中國 社會と文化』二〇、二〇〇五年) 参照。
- (49) 『劉義慶』撰『徐州先賢傳』十卷、奏上之。又擬班固『典引』爲『典敍』、以述皇代之美(『徐州先賢傳』十卷を撰し、之を奏上す。又班固の『典引』を擬して『典敍』を爲り、以て皇代の美を述ぶ。)(『宋書』劉義慶傳)
- (50) 川合安「元嘉時代後半の文帝親政について—南朝皇帝權力と寒門・寒人—」『集刊東洋學』四九、一九八三年。
- (51) 『世説』成立時期に關する主な研究として、林田慎之助『世説新語』の清議と清談(『學林』二八、二九號、一九九八年)は、特に根據は提示せぬが元嘉十八年と斷定する。楊勇『世説新語』書名、卷帙、

版本”考(『東方文化』一九七〇年)は、元嘉十六年、劉義慶が江州刺史となったときであるとする。寧稼雨前掲論文はこれを補充して、元嘉十六〜十七年とする。

- (52) 『宋書』卷二十八・符瑞志中、同卷二十九・符瑞志下に見えるだけでも、劉義慶は十回に渡って瑞兆を報告あるいは獻上しているが、うち七回が元嘉十七〜二十年のものである。義康・義慶の對面以降急激に増えていることが顯著であり、文帝への迎合に腐心する劉義慶の様子が窺える。劉義慶は、瑞兆を數多く報告して文帝の機嫌を取り、その裏で『世説』の編纂を進めたのかもしれない。

- (53) 「劉義慶に同情した人が劉宋文帝の假託先として曹丕らを選んだに過ぎず、劉義慶本人は『世説』編纂には関わっていない」と考えることもできる。だが、『世説』が編纂の際に参照したであろう膨大な原史料の収集や閲覽は、強力な權力者の元ではじめて可能な作業だったはずである。例えば、『世説』と同時代に成った裴松之の『三國志』注は、廣い文獻収集で知られるが、それが可能だったのは、敕命による作業だった(『宋書』卷六十四・裴松之傳)からであることは想像に難くない。加えて、『世説』編纂期は、劉義慶・義康の涙の對面が文帝に怪しまれた元嘉十七年とほぼ一致する(前述)。このことと、『世説』の持つ「皇弟を迫害する皇帝への批判的筆致」とを併せて考えると、以下のように考えられる。「元嘉十七年頃、皇弟迫害を行う文帝の矛先が自分にも向き得ることを自覺した劉義慶は、『世説』における曹丕や司馬炎描寫を通し、皇弟を迫害する皇帝の非道と、それに翻弄される皇弟の悲運を後世に伝えんとした。同書の原史料となる文獻は、皇族の權力を利用して廣く収集された」と。無論、『世説』が、皇弟の苦境を伝えることのみを目的に編まれた書であるというわけではない。だが少なくとも、『世説』編纂に劉義慶の意圖が大きく關與していることは間違いないと思われる。